

研究ノート

近世の知から近代へ その二 ―博覧強記と「万国」―

山本光正

近代の知

はじめに

近世から近代へ。政権に関わる以外の人々は自らの意思とは関係無く、新たな時代に送り込まれた。そこにはこれまでとは異なる様々な世界が展開した。「知の世界」もまた同様であった。

これまでほんの少しだけ垣間見ることができた「西洋の知」が眼前に広がったのである。

「西洋の知」と言っても、高度な学究的な知から大衆の好奇心を満たす知、物知りになるための知である。ここで主に取り上げるのは後者である。

西洋文明・文化への憧れ、コンプレックスは今に至るまで続いていいると言つてよいが、明治も中期頃から政府は表面的には西洋に追いついたと国民に思い込ませるようになっていいる。ここでは飽くことのない日本人の知的欲求、知りたいという欲求等が基盤となった明治以降の日本の歩みを垣間見ることしよう。

(一)幕末維新时期

徳川幕府が崩壊し天皇制国家が成立した。一般的な歴史区分で言うなら近世から近代へ移行したわけである。近代という用語は近代的≡先進的・時代の先端という意味もあるので、ここでは明治時代と表記することもあるので断つておく。

一 江戸から明治へ

幕末から明治政府樹立までの幕末維新时期は激動の時代として小説・映画・ドラマ等々に取り上げられている。いかにも時代の転換期という派手な作品を作りあげる。そのため多くの人々は幕末維新时期を疾風怒濤の時代と思つてしまう。

疾風怒濤の中にあつたのは政権の側にあるもの達であつた。勿論戊辰戦争に巻き込まれたり、その余波を被つた人々もいたが、多くの人々にとつては埒外の出来事であつた。

筆者が学生時代であつた頃は学生運動、大学紛争の全盛期であつた。安保闘争において一九六〇年に樺美智子が死亡している。筆者は「ノンポリ」であつたが、駿河台をはじめ、都内の各所に展開するデモや学生運動を見ていると、何だかよく分からないがこれまでとは違う世の中が出現するのかもしれないと思つた。

大学院に進み地方へ古文書の調査に行くようになると、地元の人々と話

をするようになった。彼らも安保闘争や学生運動の状況をテレビの映像を通して十分承知しているが、敢えて言うなら淡々と受け止めているようであった。「青二才」とは異なり冷静であった。こうした人々を納得させない限り新たな世界を作り上げることはできない。

しかし往々にしてこうした人々を無視して次の時代が作り上げられる。坂本龍馬が「新しい時代がくる」というようなことを言ったところで当時それを理解するものはごく一部の人々であっただろう。

大衆を無視した場合大衆は面従腹背。忍耐強く過ぎ去るのを待つ。但しこれは単一民族の日本だから言えることかもしれない。このように記すと当然日本は単一民族ではないという反論がある。確かにその通りだが、世界的にみれば微々たるものである。

疾風怒濤の中にいたのは政権の側であるが、大衆が明治という時代をどのように受け入れていったのかをみてみよう。

(二) 幕末維新期と国民

① 明治政府の政策と日々の生活

明治政府は国家の機構作りに邁進した。このことは結果的には日本という国のあり方や国民生活に大きく関わることはあるが、直接或はすぐさま日常生活に関わることはなかった。しかし日常生活に直接関わる法令なども次々とだされた。その状況は次の通りである。

明治元年

七月江戸を東京と改称・八月東京府庁開設・九月郵便規則布告・十月明治天皇東京着

(年月日については旧暦・新暦の換算は無視している。以下同)

明治二年

一月日章旗を国旗と定める・関所廃止・三月明治天皇再び東京へ・七月東京へ横浜間定期蒸気船

明治三年

一月神道国教化強化・三月人力車営業許可・四月種痘
九月平民に苗字使用許可・四人に刺青禁止・十二月太政官指令により

社領寺領の境内以外の領地を上地

明治四年

一月東京・京都・大阪間の郵便開設規則頒布・三月郵便規則実施。切手発行・ポスト設置・四月旧藩札発行禁止・戸籍法を制定・大区小区制・郵便制度実施・七月廃藩置県・八月散髪脱刀令・九月江戸城から午砲、正午を知らせる(お昼のドン)・十月宗門人別帳を廃止

明治五年

一月全国戸籍調査・二月田畑永代売買禁止令廃止・築地・銀座火災煉瓦街計画・三月横浜に日本人による初のキリスト教会設置・高野山女人禁制を解く・四月庄屋・名主・年寄廃止、戸長・副戸長を置く・日曜日を休暇とす・十月新橋へ横浜間鉄道開通・十一月太陽暦採用・大相撲女性解禁を許可・徴兵令・十二月人身売買禁止令

明治六年

一月太陽暦・徴兵令発布・紀元節祝日・公園設立の布告・二月仇討禁止令・キリシタン禁令高札撤去・四月電線付近での凧揚げ禁止・七月地租改正条令布告・十一月祭日に国旗掲揚を定める・初めて郵便はがき発行

明治七年

一月警視庁設置・三月人口調査・七月巡査の棍棒を廃止。帯剣とす・十二月東京市街にガス燈

明治八年

一月招魂社・郵便為替施行・最初の郵便局横浜に落成・小学児童の学齢を定める・国産マッチ製造始まる・二月新税法制定・五月郵便貯金業務開始・六月気象台設立・讒謗律制定・十月煙草税創設

明治九年

三月土曜日半休・四月男子二〇年を成年とす

明治十年

二月西南戦争・八月上野で第一回内国博覧会
取り敢えず明治十年までを列挙したが、国民生活との関連を厳密に検証したわけではないことを断っておく。

このほか地域にもよるが廃仏毀釈及び旧弊・迷信の打破も無視することはできない。

特別な意味を持って明治十年までとしたわけではないが政情は別として、この頃を契機として国民の日常生活などに影響を与える政策などとはひと段落したようである。

それでは次に当時の日記などから幕末維新期をどのように暮らしていたのかをみてみよう。

(三) 大衆の幕末維新

幕末維新というと、研究者は大衆もいかに激動の時代に巻き込まれていたかを表現しようとする。筆者も以前は日記の中から「激動の時代」との関わりを探し出そうとした。そこに「激動の時代」との関わりが少しでもあると、何となく安心したものである。

それでは多くの国民が幕末維新期をどのように過ごしたのかを具体的に『関口日記』からみてみよう。

『関口日記』は石井光太郎・内田四方藏の編集校訂で横浜市文化財研究調査会が発行。本日記は現横浜市鶴見区生麦の名主・戸長などを務めた関口家当主五代にわたるもので、文化三年(一八〇六)から明治三四年に及んでいる。

生麦村は東海道沿いに位置する。東海道は近世から近代にかけて最新の情報が行き交ったところである。その最新の情報の真っ只中にあつた生麦村の様子をみてみよう。

文久二年(一八六二)八月二日生麦村付近で島津久光の行列に遭遇した騎馬のイギリス人を藩士達が殺傷。世にいう生麦事件が起きた。生麦村が最新情報の発信地になってしまったのである。この事件について『関口日記』(一五巻)は次のように記している。

廿一日辛未晴天

末吉屋婆々三十日目

徳坊主今日休二分式百文相渡済、

島津三郎様御上り、異人四人内女老一人横浜より来り、本宮町勘左衛門

前二而行逢、下馬不致候哉異人切付直二跡へ逃去候処追被欠、老一人松原二而即死、外三人ハ神奈川へ疵之儘逃去候二付、御役人様方桐屋へ詰ル、右異人死骸ハ外異人大勢来り引取申候、

後にこの事件は生麦村事件などと呼ばれ多くの人が知るところとなり、幕末の映画やドラマにもしばしば取り上げられている。

日記は一日の終わりに記されるのが一般的であるから、先ずはこの事件のことが記されて当然と思うが、冒頭には末吉屋の婆々が亡くなって三日目とある。順番からは婆々の死であろうが、現代人からすれば外国人殺傷事件が冒頭になってしまう。

この事件は大きな話題になっただろうが、日記にはそうした記述は無い。日記の筆者は噂話など記さない方針かもしれない。

現代人であればほとんどの人がこの事件を承知しているほど有名な事件である。『関口日記』の記事も現代人は無意識のうちに誰でも知っている有名な事件という意識で読んでしまう。これでは当時の状況を冷静に見ることができない。

唐突ではあるが、今鎌倉幕府がいつ成立したかが話題になっている。学的には重要なことなのだろうが、頼朝は鉦や太鼓を打ち鳴らし鎌倉幕府の成立を声高らかに宣言したわけではない。数年の違いが幕府を揺るがすことになるのだろうか。それより筆者の立場からみれば一般大衆がいつ頃頼朝の存在を知り、武士の世の中になったかを意識したかというところだろう。尤も文部省としてははっきりさせないと教科書や試験に支障が出るのだろう。

『関口日記』に戻ろう。翌二二日の日記の冒頭に末吉屋の婆々三十一日、続いて重兵衛娘死去の香典。そして先達て下向した勅使が京に戻る支度の記事。二四日の記事に末吉屋婆々のこと、勅使通行のことの後に、「七時半時過定御廻り三橋敬助様当方へ御出松原徳次郎女房并甚五郎女房異人殺害二而落馬いたし候始末御尋二付参ル、夜二入御帰り二相成候、」と記されている。これ以降日記には事件の記事はないようである。

事件を皆が口にするなどというより、触らぬ神に祟りなしというのが実態だったのだろう。日記の記事は事件の一級史料といつてよいものである。

しかし將軍か天皇かよりも当然のことながら日常の生活が一番重要なのである。

慶應四年五月一五日の『関口日記』（一六卷）には「今日江戸上野辺二而関東方と官軍方と戦争有之候由、出火当村二而見ル」彰義隊全面敗北の戦いである。この記事も日常的な記事の後に書かれている。この記事から今日あたりに上野で関東方と官軍方の戦争があるだろうという情報は既に得ていたということである。

同年八月二日には

今般英国戎服衣類売買不相成候二付、小前請印帳差出候様御取縮係より御触二付平兵衛方二而小前印形取立会、

異国の衣類購入の禁止であるが、この禁令は朝廷側が出したものであるうか。

二 国民にとっての明治

慶應四年九月一七日の『関口日記』（一六卷）には

今日年号改元御触明治と成、

これで年号の上では明治に入るわけである。但し政府が年号を明治としたのは、慶應四年九月八日のことであるから、日本各地の町や村に明治になったことが行き渡った日時には誤差があっただろう。それにしても混乱の時代に「御触」が日本各地に行き渡ったであろうことに驚嘆せざるをえない。このことは敗戦下の日本の指揮命令系統が壊滅状態にならなかったことを想起させる。

日記の記事を表面的にみている限りは江戸の風が吹いているようである。東海道沿いの村であるから波乱万丈とまではいかなくとも、明治の風が強く吹いていると予想したが、繰り返すように日常の記録が優先している。日常生活が最優先である。

明治元年一〇月一日は天皇の東行により、神奈川宿に宿泊するが、その時の日記は次のようなものであった。

十一日庚寅陰天

御東行二付、今日神奈川宿御旅宿二相成、明日御通行、

大工松五郎壱人 五日目

隠居所兩戸貫抜拵今日限二而相休申候、

十二日乙卯晴天

今日

御通行二相成、品川宿御旅宿之由、

定御廻り藪田様・椎名様御帰り御立寄、

天皇の通行であるからもう少し日記の中で大きく扱っても良いのではと思うが、隠居所の兩戸の修理の方が重要であったようだ。

明治一年の日記には「東京」「裁判所」などの記述が出てくるが、九月にはいかにも明治という記事がある。

廿九日丁酉陰天

昼後より小雨

伝信機柱建昨日より当村始り、

電信柱の設置と電線である。

明治三年に入るとこの地域特有の記事が多くなる。それは新橋・横浜間の鉄道敷設である。

の鉄道敷設である。

明治三年六月朔日の『関口日記』（一七卷）には

……渡船二而横浜行、夫より帰り、紀三へ立寄、紀三事今般鉄道御製造二付、新埋地より紀三近所へ通二相成候二付、見舞寄、

鉄道敷設に関する記事が見える。続いて七月八月九月十月……と鉄道敷設に関して記されているが、主な内容は鉄道敷設に関する用地の収容や測量に関してである。

明治五年九月八日の『関口日記』（一七卷）には鉄道開通と記され、

一二日には「主上様鉄道乗車」とあり、天皇は主上と書かれている。そして十月五日には日記の筆者関口氏が神奈川より鶴見まで乗車している。以降関口氏は移動のために鉄道をしばしば利用している。

明治四年貨幣制度の改革。徴兵令。地租改正等々日常生活に関わる改革や新制度ができるが、それぞれ取り上げては収拾がつかなくなってしまうので、ここでは太陽暦の採用について述べておこう。

日本の暦は太陰太陽暦であったが、明治政府は明治五年一月九日太陽暦の採用を決定した。『関口日記』（一七巻）には十九日に太陽暦の採用について記されている。長文に及ぶが引用しておくことにする。

十九日庚子薄晴

今般太陰暦ヲ廃シ太陽暦御頒行相成候ニ付、来ル十二月三日ヲ以テ、明治六年一月一日ト被定候事、但新曆鏤板出来次第頒布候事、一ヶ年三百六十日十二ヶ月二分ケ、四年二一日ノ閏ヲ置候事、

外略々当方ニ而写し置不申候、

右之通被仰出候御触書到来、

廿日辛丑晴天

廿一日壬寅晴天

曆御改正来ル十二月三日者明治六年一月一日と相成候ニ付は、迷ひ生シ方向を差ひ候者も不尠由ニ付、左之通可相心得候、

一 一月一日は都而是迄之正月元日同様新年を賑々敷相祝可申事、

一 門松・しめ飾り・雑煮其外銘々家風を以是迄祝来候分は、其通可致事、若相改度者ハ改候とも都而銘々適宜ニ致可申事、

一 一月一日・二日・三日ト日数三日は休庁、四日は是迄之三ヶ日と同様可相心得事、

一 門松・しめ飾り之儀ハ右三日丈ケかざり、四日取片（付脱カ）可申事、

一 年之市相立候儀は不苦候条、都合宜敷日を相（脱字カ）其節可届出事、

一 煤払并餅搗等を是迄之通銘々適宜ニ可致事、

右之通御触書到来致候、

当時のほとんどの日本人は暦に太陰暦と太陽暦があることなど知る由もなかったであろう。それが突然太陽暦の採用である。恐らく人々は面食らったことであろう。しかも明治五年十二月三日を明治六年一月一日とするというのであるから、太陽暦は何が何だかよくわからないうちに日本人の生活の中に入り込み定着していったわけである。しかも正月行事や祝い方で指導している。

太陽暦による諸行事は長崎出島の阿蘭陀館では当然行なわれていただろう。ウイキペディアの「オランダ正月」によれば、諸行事のうち日本の正月元旦の祝いを太陽暦で行い、出島の幕府役人や町役人・通詞らを招待し西洋料理でもてなした。これが阿蘭陀正月と呼ばれるようになったという。江戸においては江戸中期の通詞吉岡耕牛宅で太陽暦の正月が行われ、大槻玄沢ら蘭学者からも参加している。その後大槻玄沢も自宅の塾芝蘭堂で太陽暦の正月を祝い、天保八年まで四四回行われたという。こうした蘭学者らは太陽暦を承知していたし、太陽暦の採用を歓迎したのである。但し太陽暦の採用が便利だからというより西洋に一歩近づいたという発想だろう。そもそも阿蘭陀正月自体西洋文化への憧れであり、モノマネの最たるものである。

片桐一男氏は小学館の『日本大百科全書』の「阿蘭陀正月」の項で、「……もちろん好奇の舶来趣味に発するところであるが、一方では西洋の医聖の肖像を掲げてその業の発展を期し、新来の学問としての蘭学の大成を祝い、かつ願う心から発したものと見受けられる。」と述べている。蘭学者と呼ばれている人々の西洋医学や科学への取り組みは評価されて然るべきものであるが、阿蘭陀正月そのものは西洋への憧れであり、自分達は西洋文化の中に浸っているという自己満足である。この姿こそがその後のそして今日に至るまでの日本人の西洋文化に対するものであり、憧れそして劣等感である。しばらく前にボジョレーヌーボーを熱狂的に祝う映像がテレビに映し出されていた。その持つ意味付けは幾らでもできるが、所詮は西洋への憧れであり、コンプレックスである。しかしこの憧れとコンプレックスが日本という国の原動力の大きな部分を占めるのである。

西洋への憧れとコンプレックスの中心は明治政府である。それにしても驚くべきことは、正月行事も太陽暦になってしまったことである。しかも太陽暦採用の関係から朝廷行事まで変更されている。

『法令全書』明治六年一月四日の太政官第一号によると、

今般改曆ニ付、人日・上巳・端午・七夕・重陽ノ五節句ヲ廃シ、神武天皇即位日

天長節ノ両日ヲ以テ自今祝日ト被定候事、

五節句を廃止している。太陽曆に合わせて宮中行事まで変更してしまうということは、日本という国の伝統をかなり捨てるようなものである。中国を始めとする東南アジア諸国は太陽曆を採用しても旧曆の正月を中国では春節、韓国ではソルラル、ベトナムではテトとして休日になり祝っている。

決定されれば若干の抵抗があっても多くはそれに従う。そこに日本人的行動を解き明かす素材の一つがあるのかもしれない。昭和三四年（一九五九）メートル法が採用され、尺貫法は使用が禁止された。当時中学三年であった筆者の同級生達は、世界は全てメートル法かと思っていた。メートル法一本化は太陽曆の正月移行と通じるようである。

筆者の若い頃立教大学の林英夫先生に「山本君。近代国家・明治政府は土足で人の家に入り込んで来たんだよ」と、何度か話して下さったことを思い出す。当時はその意味がよく分からなかったが、恐らく村請制の崩壊に関連してのことであろう。

江戸時代の農村は年貢をはじめ、人別帳の作成や上からの指令・指示等々は個人ではなく村に掛り、それを名主・組頭等の村役人が処理してきた。そのため村社会の慣習や規則を乱す行為は「村八分」的行為とみなされたわけである。自己主張や自己の確立・自我など以ての外であった。

明治に至り土足で明治政府は人の家に入り込んで来たが、これまでの村落共同体のタガが一気に外れることはなく、村落共同体・村請制の残滓は今も引き摺っている。しかし明治に入って村落共同体のタガが少し緩みだすと、その緩みの中に自己主張や自我が芽生えただろう。

三 学校教育と西洋文化

子供達が西洋文化と接するのは学校教育によってであった。

近代日本における教育は明治五年太政官布告の「学制」で始まった。学制はフランスを基にしたものであったが、明治一二年学制は廃止され「教育令」が定められた。教育制度には紆余曲折があったようだが、ここでは教育制度について述べるのが目的ではないので、学校教育により現在で

いう小学校程度の児童達が西洋に接したことについて述べていく。

(一) 教師のための教科書

文明開化。新しい時代といったところで人間は直ちに新しい時代の人間になれるわけではない。子供達は学校教育により（明治前期に学校教育を受けることができた児童は少なかったであろうが）近代教育を受け、西洋文化そして世界、天然自然を知ることになるわけである。しかし子供達の親は近代教育を受けていない。学校では近代教育。そして自宅では読み書き算盤の世界であった。

師範学校を出たような教師にしても新しい教育とはどのようなものか考えてあぐねていたことだろう。こうした状況の中で教師のための教育指導書『師範学校小学教授法』が明治六年に出版されている。その凡例には次のように記されている。

- 一 此書ハ六歳ノ童子始テ学校ニ入りタルモノヲ教導スルモノナレバ、先ツ五十音ノ呼法ヲ教ヘ、次ニ日月・器具ノ名目等ヲ教フルモノナリ、故ニ俚言ヲ避ズ、唯童蒙ノ解シ易キヲ務ム、
- 一 問答・復習ノ仕方ハ大概ヲ拳クルト云ヘドモ又各教師ノ意ヲ以テ取捨増減アルベシ、

その内容は全てを紹介したいほどであるが、その余裕はないので特に注目すべきことについて述べておこう。それは「数字」である。日本においては一二三四五……と書いたが、12345……になるわけである。どういふ訳かローマ数字ⅠⅡⅢⅣⅤ……も教授項目に入っている。さらに日本には0という数字はなかったので10・20ということも小学生に理解させるのは大変であったろう。

明治前期の教育は教えるほうも、教えられるほうも、暗中模索である。明治期の教育制度などについては筆者の専門とするところではないが、明治前期の教育について教科書をもとにみていこう。

(二) 国語教育

教科について優劣などありえないが、基本となる教科は国語であろう。

国語は文字を覚え、文章を書くことを学ぶことによって他の教科を学び理解できるようになるからである。

国語という用語は明治三三年（一九〇〇）小学校令改正により、読書・作文・習字の三教科を統一して作られた造語であるというから、ここで取り上げるのは国語以前の時代ということになる。本稿が目的とする西洋文化等の撰取という観点からは「読み」が重要な教科である。

余談になるが、当時はまだ「作文」「習字」の教科書は無かったようである。しかし教師の教授用の参考書があったようだ。例えば『小学作文五百題』（全四冊岡三慶・安井乙熊著同朋舎出版 明治一一年）は序文や後書などから教師用作文参考書とみられる。

出版年不明だが、熊谷県学校蔵板『綴字本』（金子精一編）は習字に関連する教師用参考書のようなものである。

それでは「読み」に関する教科書「読本」についてみてみよう。

○『小学読本』全四巻師範学校編纂明治七年八月改正 文部省刊行 田中義廉編 那珂通高訂正

本書は教育史の上ではよく知られた教科書のように、特に西本喜久子氏が多く研究成果を発表しているが、ここでは当然教育史については触れない。

本書はアメリカのウイilson・リーダーを典拠としたという。読本の第一の冒頭では世界にはアジア人・ヨーロッパ人を始め多様な人種が存在することを述べ、各人種の顔が描かれている。

遊びについての項では洋服を着た子供の風揚げが描かれ、怠惰な猫の話では洋服を着た二人の少年が椅子に座り、ベッドの上には怠惰な猫が描かれている。

西洋的思考と日本の思考・文化の内容とともに洋服・椅子・ベッドなどが描かれるが、子供達に最も影響を与えたのは挿絵であろう。取り敢えず子供達は西洋の生活の一端を見ること、知ることができたのである。

このような教科書を生徒達が購入することができたのか、さらに文章はとも小学生が読めるようなものではない。これについては教育史におい

ては、教師が文章を読み、生徒に復唱させたという。生徒は教科書を購入しなかったようである。教科書の挿絵は教師が生徒に見せて回ったのだろう。

さらに指摘しておくべきことは学校教育により「候文」とは決別することになるわけであるが、現実には候文はかなり後年迄使用されている。

○『高等小学読本』池永厚・西村正三郎著 明治二十年五月出版 同年九月訂正再版届同月文部省検定済

冒頭本書の出版趣旨について次にように述べている。
全書ノ趣向

- 一 此書ハ、高等小学校生徒ノ教科書トシテ編ミタル者ナレトモ、広ク之ヲ家庭用ノ読本ニ供センコトハ、編者ノ深ク望ム所ナリ、
- 一 高等小学校ハ、満十歳ヨリ始マリ、満十四歳ニ至リテ終ン、合セテ四学年ナリ、此書別チテ八巻トナシ、一卷ヲ以テ、半年ノ課程ニ充ツ、

このような「全書ノ趣向」即ち前書は生徒達にとつては不要である。恐らく本書は教師が読み聞かせるものであって、前述の教科書同様全生徒が手にしたものではないだろうし、教授する内容も教師が説明しても生徒には理解し難いものである。

さらに驚くべきことに西洋文化に対する憧れ、吸収から、「日本」を自覚させるものになっていることである。本書は全二八章からなるが、一章は第二章は大日本帝国、一五章国體（国體では国民体育大会と混同するので国體とした）である。このうち一章の大日本帝国は当時の日本の状況をあまりにも的確に表現している。長文に及ぶが引用しておく。

第一章 大日本帝国（一）

下ニ描キタルハ、大日本帝国ノ図デアリマス。（中略）而シテ大日本帝国ハ、亜細亞洲ノ東ノ端ニ在ル、島国デアリマス。

歐羅巴洲ト北亜米利加洲トニハ、開化進歩シテ、教育モ行キ届キ、商業ヤ工業モ、甚盛ナル国ガ、多クアリマスガ、亜細亞洲ニハ、文明国ト申スベキ程ノ国ハ、一ツモアリマセン。舊ニ文明国ガ無イノデハナ

ク、支那帝国ノ外ハ、大抵歐羅巴諸国ノ干渉ヲ受クル半属国ニテ、独立国ト推シテ立ツル、立派ナル国柄ハ、稀デアリマス。唯此日本帝国ハ、二三十年以来頗ニ欧米ノ開化ヲ納レテ、教育ヲ勸メ、製造ヤ貿易ヲ励マシ、種々ノ制度ヲ改良シマシタカラ、国勢モ頓ニ盛ニナリマシテ、文明国ト申シテモ、恥カシカラヌノミカ、欧米諸国ヨリ、軽蔑ヲ受クルコトモナキ、巖然タル独立国デアリマス。吾々が、此賀スベキ

国ニ住ムコトヲ得ルハ、誠ニ仕合ナコトデハ、アリマセンカ。

見事に当時の日本の状況を表している。現実とは別としてアジアの中の最も優れた国、欧米にも伍する程の日本。そして「大日本帝国」という表現は多くの日本人にとって快く、力強いものであつたらう。

この文章を生徒が理解できたかは疑問であるが、教師がこの文章を分かり易く話す時は相当に力が入り、生徒達は欧米と肩を並べる程になつた日本を誇らしく思つたであらう。

こうした内容は兎角批判される。洗脳・プロパガンダということ。しかし良い・悪いではない。教育とは基本的にはそれぞれの国に適した人材を作り上げることである。

第二章 大日本帝国 (二)

吾々が、大日本帝国ニ住ムコトヲ得テ、甚幸福ナルハ、前ニ述マシタガ、能ク考ヘマスト、マダマダ幸福ナル簡条ガアリマス。ソハ何ゾト、申シマスレバ、吾々ノ上ニ君臨シテ、万民ヲ治メ賜フ、天皇陛下ニハ、其御稜威ノ欧米諸国ノ国君ニモ弥優リテ、イトモ尊ク在ラセ賜フ御事はナリ。何故ニ斯クモ尊ク在ラセ賜フヤト申スニ、言フマデモナク、外国ニハ、開国コノカタ、屢革命ノ乱アリテ、其国君ノ易フレドモ、吾国ニ於テハ、斯カル不臣ノ民アルコトナク、太古ノ神代ニ在リテ天神ガ、吾々ノ祖先ヲ、治メ賜ヒシトキヨリ、皇統連綿トシテ、今日ニ至リ、曾テ革命ノ沙汰ナキノミナラズ、皇位ヲ窺窺セシモノサヘナク、万世無窮ノ至尊ナレバ、天上天下、我国ノ皇位ホド、尊キモノハアリセン。吾々が、此クモ尊キ天皇陛下ノ、臣民トナルコトヲ得タルハ、誠ニ榮譽ナルコトデハ、アリマセンカ、誠ニ幸福ナルコトデハ、アリマセンカ、故ニ我国ノ民タルモノハ、皆此国ノ歴史ニ通ジテ、我皇位

ノ尊キ所以ヲ、知ラナケレバナリマセン。(以下略)

大日本帝国については世界一とは流石に書けなかったであろうが、天皇は世界に冠たる君主であると述べている。幕末維新期の天皇は東海道を往来しても歓呼の声で迎えられたようではなかったが、ここに至り天皇は神格化されたのである。

第十五章 国體

国に一定の體あるハ、猶家に各種の形あるが如し、家に平屋あり、二階屋あり、是家の形なり。国に帝国あり、王国あり、又共和国あり、是国の體なり。(中略) 国體ハ、国民長久の風習によりて、定まる者なれば。一時の思想によりて、之を改むべきものにあらず、故に人民たるものハ、各其国の國體を重ンジ、その太平を樂ミテ、己の職分を尽さざるべからず。

我日本国ハ天皇陛下の統轄し賜へる、一の帝国なり。天皇陛下ハ、他国の君主に異なりて、天祖以来、數千年の間、皇統連綿として、永く皇位を嗣ぎ賜ふ。地球上に、国多しと雖、此の如き國體ハ、決して其比を見ず。されバ、我國民ハ、固く此國體を守り、皇室を尊びて、仁沢に浴せざるべからず。(以下略)

繰り返すが生徒が理解できたかどうかは別として、日本の次に向かうべき方向が見事に示されている。欧米への憧れから脱し、日本も欧米に勝るとも劣らない国を生徒に、国民に印象付けるものである。劣る所は國體・天皇で誤魔化そうとしている。

『高等小学校讀本』は小学生が読んでも理解できるものではなかったが、明治二七年出版の『尋常小学讀書教本』卷八(今泉定介・須永和三郎編明治二七年)は平易な文章で活字も大きい。八卷の冒頭第一課が「我が國の國體」だが、その最後には以下のように書かれている。

(前略) 故に未だ一たびも外国の侮を受けたることなく、我が國の威光は、高く世界の上に輝けり、
 是は、実に我が國固有の美風にして、世界各国に比類なき所なり。此のたふとき國體を、永遠に伝ふべきは、吾等臣民の、喜び勇ミテ、日夜に務むべきことなり。

明治三三年の学制改革により、当時の小学生が読んでも理解できるであろう教科書が出版されるようになると、国體を始め世界から見ても「優れた日本」が分かり易く記されるようになった。但しこれまでの教科書の記述からも分かるように西洋文化そのものに勝る日本ではなく精神面等における優越性を強調している。

国家・政府は国民に優秀なる日本・日本人という意識を植え付けてしまった。これにより日本・日本人は大きな誤解を持つに至り、より強い国・強力な軍隊の育成に走るのである。

(三)理科教育

西洋思想や思考等より、日本が何をにおいても西洋から学び取りたかったのは実学であろう。実学という表現が適切ではないかも知れないが、日本が積極的に取り入れようとしたのは、医学・工学・農学・法学・経済学等々実生活に役立つ学問分野であり、国力向上に役立つものであった。理科という名称は江戸時代に造語されていたというが、小学校の教育に「理科」が設けられたのは明治一九年小学校令によってであった。理科とは大雑把な言い方になるが、「究理学」・「博物学」・「化学」・「生理学」の総称であった。(小林昭三著「明治中期「理科」教育の新実相」大学の物理教育17)(日野純一著「日本の理科教育の変遷と展望」京都産業大学教職研究紀要11)

筆者の関心はどのような教科書を使用したかである。小林氏は明治前期の理科教育(明治前期には理科という教科は無く、それに相当する名称も定かではない。そのためここでは理科とする)は世界的にも高いレベルの科学教育が日本では実現したと言い、教科書として『物理階梯』『物理小学』『物理全志』『物理小誌』『格物全書』等を挙げている。

日野氏は『物理階梯』を教科書とし、「主に読書式又は口授法で欧米の自然科学の知識を教えていた」と述べている。

両氏はこの部分では小学校教育について述べている。問題は教科書である。ここでは『物理階梯』をみてみよう。本書の「題言」に

一 国家小学ヲ設ク児童ニ中外ノ歴史ヨリ物理数学等ノ各科ニ至ル

(以下略)

とあり、本書が小学教育のために翻訳されたことは確かである。次に本書の内容の一部を紹介しておこう。

引力性 又重力

万物各々他ノ物体ト互ニ相牽引スル力ヲ有セサルモノナレ、是ヲ物ノ引力性ト曰フ、蓋シ此力ハ畜ニ地上ニ在ル物ノ有スルノミニ非ラス遠ク日月ニ達シ、総ヘテ諸体ヲ互ニ相接近セシメントスル力ナリ、……(以下略)『物理階梯上』

第三十課 電気論

電気ヲ論スルノ学英语之ヲエレキテリシテイト曰フ、蓋シ希臘国ノ方言ニ琥珀ヲ呼テエレキトロント云ヘルヨリ出ツ、……(以下略)

第三十一課 電気ヲ発生セシムル方法

電気ヲ眼前ニ発見セシメ以テ其作用ト本性トヲ試験スルノ法数件アリテ、其中最モ簡約ナルハ摩擦ニ因リテ起ルモノナリ、(以下略)

一 物体ニ電気ヲ聚メ之ヲ顕明ナラシメテ、他物ニ移シテ万物中自然ニ発生スル現象ヲ試ミ試験ノ便ニ供スル器械数種アル中、世人ノ能ク皆知スル器ハ、玻璃円板ヲ以テ製造セシモノナリ、……(以下略)『物理階梯下』

本書は教師用というが、多くの教師自身が理解できたのだろうか。まして小学生が幾ら説明されても理解できたとは思えないのだが。小林昭三氏は「世界的にもかなり高いレベルの科学教育が日本では実現した。『物理階梯』『物理小学』『物理全志』『物理小誌』『格物全書』はその代表的な教科書だ。」と述べているが、小学生が理解できたと本当に思っているのだろうか。それとも小学生といっても筆者が考えているような現在の小学生とは全く異なるのだろうか。

理科教育も国語教育同様に明治二〇年代以降は小学生でも何とか理解できる教科書が編纂されるようになった。学海指針舎が明治二五年に出版した『小学理科新書 甲種卷二』には、植物・海産物・有背動物・無背動物・温血動物冷血動物・哺乳類・人体・鳥魚昆虫・鉱物・石・水・空気などが

収録され、空気の項には潜水器や風船の絵が掲載されている。

同じく学海指針社が明治三二年に発行した『新撰小学理科卷四』には蒸気機関・蓄音器・光線の反射図・電信機等々の図が豊富に掲載されている。内容は難しいであろうが、こうした図を見ることによって西洋の科学と接することができたのである。

この他算数や音楽などについても述べたいが、紙数の関係もあるので省略せざるをえない。

四 大衆と西洋文化

子供達は学校教育により西洋文化と接することができた。これに対し多くの人々は自ら西洋文化と接する機会を作らなければならなかった。都会の住人であれば電信柱や電線をはじめ、ガス燈・西洋風建造物・蒸気機関車等々西洋文明を目にすることができた。しかしそれ以上のことを知りたいたいということになれば出版物に頼ることになる。政治・経済等を始めとする多分野の翻訳本や実用書が出版されたが、ここでは気軽に西洋文化に接し物知りになりたいという欲求を満足させる出版物を取り上げよう。

(一) 気軽に西洋を知る出版物

○『英学捷徑 七ツ以呂波』阿部為任著 慶應三年 小冊子

本書は著者によれば英人著述の日本文法書等を参考にしたという。その内容は先ず最初にアルファベットの大文字とその右側にカタカナで振り仮名。次の頁は小文字と振り仮名。次に大文字の筆記体と振り仮名。そして小文字の筆記体。次にローマ数字とそのスペルとカタカナによる発音。

さらに「英字以呂波」と題してアルファベットの大きな文字・小文字筆記体による「いろは……」の一覧が書かれている。

当然本書で英語が学べる訳はない。しかし周囲の人に対し自分は英語を知っていると吹聴することができただろう。

○『世界商売往来』橋爪貫一著 明治六年序文 小冊子

江戸時代以来多数出版された往来物の形式である。上段には物品や動植物等々の英単語とその読みがカタカナで振り仮名。下段は世界の国名から

亞拉伯 數字	羅馬 數字	日本 數字	重 拉 伯	羅 馬	日 本
1	I	一	40	XI	四
2	II	二	50	L	五
3	III	三	60	LX	六
4	IV	四	70	LXX	七
5	V	五	80	LXXX	八
6	VI	六	90	XC	九
7	VII	七	100	C	百
8	VIII	八	200	CC	二百
9	IX	九	300	CCC	三百
10	X	十	400	CD	四百
11	XI	十一	500	CDCC	五百
12	XII	十二	600	D	六百
13	XIII	十三	700	CM	七百
14	XIV	十四	800	DCCC	八百
15	XV	十五	1000	M	千
16	XVI	十六	1275	MDCCCLXXV	千二百七十五
17	XVII	十七		LXXV	七十五
18	XVIII	十八	2000	MM	二千
19	XIX	十九	10000	XM	一万
20	XX	二十	100000	CM	十万
300	XXX	三百	1000000	M	百万

『世界商売往来』

始まり、西洋の様々な物品等々が絵入りで紹介されている。本書もまた手軽に西洋を知ることができるものとして人気があったようである。手元に三冊の『世界商売往来』があるが、その内の二冊に旧所蔵者が記されている。

明治四年版の『世界商売往来』には「東山梨郡神金村 広瀬瑛主」と裏表紙に墨書されている。神金村は明治八年に山梨郡下小田原村・上小田原村・上萩原村が合併して成立し、同一一年に東山梨郡に所属している。このことから広瀬氏が本書を入手したのは明治一年以降のことである。東京或は甲府において新刊又は古書を求めたのであろう。なお川崎市立日本民家園には山梨県甲州市塩山上萩原より移築した広瀬家住宅が展示されている。本書の広瀬氏と広瀬家住宅は何らかの関係があるのかもしれない。

明治六年版には裏表紙に「泉阪…… 茂木はつ女」とある。本書の奥付には二行書きの朱印があり、右の一行は判読できないが、左側は「茂半」と読める。はつ女は茂木家の娘あるいは妻女であろうか。

(二) 科学分野の啓蒙書

多様な西洋文化が怒涛のごとく日本に流入したが、研究者等は別にして日本人が初めて接したのは科学の分野であった。化学・物理・気象・天文等々である。この分野に関しては手軽な出版物から専門的なものまでかなり発行されたようである。ここでは当然手軽に知的欲求を満たしてくれる出版物を中心に述べていこう。

○『天変地異』小幡篤次郎著 明治元年 小冊子

凡例によれば「一此書元來婦人小児の惑を解き、事物の道理を究めしむるを主意とすれハ……」とあるように事物の道理、原理を解き明かすもので、避雷針・地震・彗星・虹・日輪・月輪・流星・陰火(不知火)について記されている。必ずしも分かり易い内容とは言えないが、親しみやすい絵が挿入されている。

いずれにせよこれまで不思議な現象と思われていたことを科学的に説明しようとしたものであり、多くの人々にとつては謎解きのようなものがあったろう。

○『訓蒙窮理図解』福沢諭吉著 明治元年 全三冊 小冊子
凡例によれば

一此書翻訳の体裁を改て専ら通俗の語を用ひ、且窮理の例を挙て図を示すも多く日本の事柄を引たるハ、唯兒女子に面白く解し易からんことを願ふものなり、

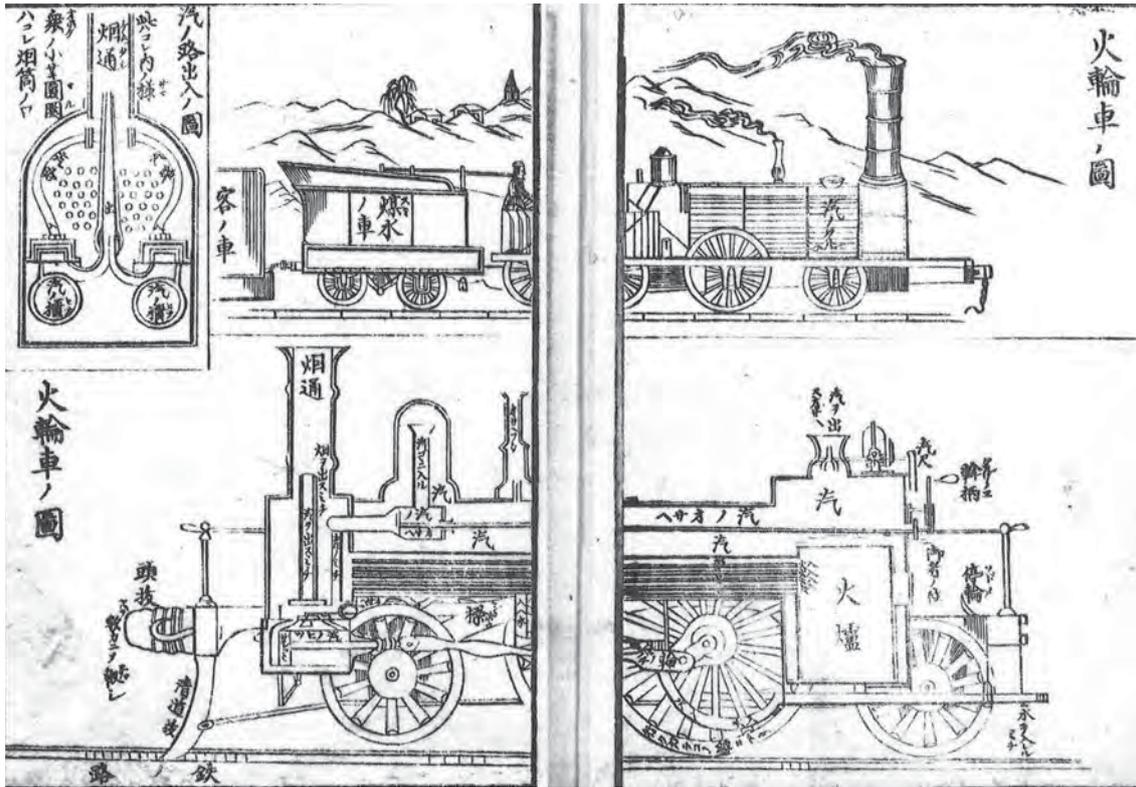
とあるように、「窮理」について分かり易く解説したものである。本書は英米の著書を基に編纂された翻訳本である。なおこれまで、そしてこれから紹介する著書も当然翻訳本である。

本書の目録は、温気(熱気)・空気・水・風・雲雨・雹雪露霜氷・引力・昼夜の事・四季・日蝕月蝕である。本書もまた親しみやすい絵を載せている。



『訓蒙窮理図解』二 サイフォンの原理

兎に角これまで不思議と思っていたことが「科学的」に説明されているのであるから知的好奇心を満足させるに十分であったろう。前掲書の『天変地異』にしても、本書にしても、「引力」「空気」「顕微鏡」等これまで見たこと



『博物新編訳解』二

もない語彙が次々と出てくるのである。

こうした啓蒙書を一生懸命熟読した人も多くいたと思うが、筆者の手元にある原本の多くは虫食いや水損等による汚れはあるものの、熟読による痛みがあるものは極めて少ない。窮理・科学・化学・物理・天体現象等の字句がならぶ本は珍しく、思わず手に入り購入してしまったのだろう。今こそ物理や化学等は苦手、嫌いという人は多くいるが、明治のこの頃の人々は物理も化学も初めて接するものであり、好きも嫌いもない。『天変地異』にしても、『窮理図解』にしても、さらに他の同様の本にしても、見出しを見ればこんなことがわかるのかと思わせてくれる。このような啓蒙書には分かり易い図版が多く挿入されている。

物理や化学の本など見たくもない筆者であるからこそよく分かるのである。上記の本には複雑な計算も化学式もほとんど書かれていない。要するにこれまで出会ったこともない学問を分かったような気にさせてくれ、知りたいという思いを満足させてくれるのである。

こうした書籍は先にも少し述べたが地方の知識人或は地域の官吏・役人が東京に出た折り又は地元で古本等を購入したのだろう。

物理学者で東京帝国大学総長に就任した山川健次郎もこのような啓蒙書を読み、触発されたのかも知れない。

「はじめに」においても少し述べたが、鎖国・島国の日本では江戸時代の人々の知りたいという欲求を満たす供給源は幕末に近づくにつれ枯渇していった。明治に至ると西洋文明が堰を切ったように日本に流れ込んだが、中でも物理や化学などは大半の日本人が初めて接する分野であった。こうした啓蒙書は拾い読みでも何となく蒸気機関車や船が何故動くのかを知ることができる。一方本書が契機となり学問の道に進む者もいただろう。

五 旧来の知的欲求の延長

西洋文明直輸入の翻訳出版物に対し、江戸時代以来の系譜を引く出版物も相変わらず出版されている。その幾つかを紹介しておこう。

○『懷宝日用鑑』宇喜田小十郎編 明治一〇年

本書は知的欲求を満足させるというより生活便利帳である。この種の本

は多く出版されているので参考までに挙げておくが、その主な内容は以下の通りである。

。東京横浜間時刻・賃金表。神戸西京間時刻・賃金表。年中祭日。官幣・国幣社。府県管轄地及び里程。東京より海上里数。郵便税則。役所へ提出書式。年賀状等葉書書式

等々で生活百科である。

○『万民必携活用一千便』小石碌郎編明治一八年

『懷宝日用鑑』は横長の小冊子であったが、本書はそれより小さい横長小冊子で縦6、8センチ、横13センチで一七一丁である。その内容は日用便覧を超えたもので、主な内容は次の通りである。

。諸規則。年中日用文。物品等々数量。小笠原諸礼。万積物図式。万折形図式。生花独稽古。茶の湯心得。日本西洋新發明料理。四季献立。男女衛生交合秘訣。家相吉凶。九星吉凶。諸事吉凶。和洋秘伝。雑之部
内容を分かり易く紹介すると膨大な紙数になってしまうので省略せざるを得ない。これでは何処に何が書いてあるのかを探し出すだけで大変である。

○『現今活用記憶一事千金』上 樋口文二郎編 明治十九年

筆者所蔵本は上巻だけであるが、形態は『万民必携活用一千便』と同様で、二三丁である。下巻の丁数は分からないが上巻と同様だろう。上巻に下巻の目次も掲載されているので主な内容を記しておこう。

。諸規則。運筆法則独学。漫画写生之独学。南宋画独学。石印篆刻独学。和歌詠心得之大概。煎茶ノ独学。茶湯独学大概。茶室ヲ建ル規矩ノ大概。活花独稽古。鉢山図式。盆栽培養法ノ大概。庭造心得並図式。西洋料理大概。和洋妙術秘伝法。家相可否弁解ノ略記。人相大概之図説。万家用心得の徳。活益日用文。商家日用文。電信文。信書贈答文。記事論説祝詞之作例。横文字独稽古。内国各港航海里程表。国立銀行并私立支店付。諸規則追輯。諸証書之文式。商家実益心得

よくも万般の事項を詰め込んだものである。即役に立つ項目もあるが、茶の湯にしる、庭造りにしる、上っ面を知るだけで知った風を装うことができるわけである。

○『日用百科国民之宝』明治二〇年 澤田誠武編 全六冊

確たる出版年はよく分からないが、巻四の奥付に「明治十九年十月十五日版權免許同二十年一月刻成發兌」とあることに依った。編集者は表紙見返しには澤田誠武とあるが、奥付には樋口文次郎とある。さらに巻によつては澤田誠武編とある。ここでは書誌学的分析は目的ではないので、指摘に留めておく。

本書も横長の小冊子で、前掲書よりやや小さめである。しかし全六冊で、三二二頁もあり、厚さ四センチである。なお本書は和装本であるが、丁数ではなく頁である。

本書の内容を紹介するまでもないし、とても紹介できるものではない。要するにこの類の出版物の行きついた先ということである。

購入者はこれが有れば大丈夫という安心感のためであろうか。誰かから質問されたり、必要が生じた時は必死になって頁をめくったのだろうか。

○『智慧の庫』

読みは「ちえのくら」である。本書は和装で頁表示である。本来は十頁程を仮綴で出版し、後に十号分を合冊にしたものである。

筆者所蔵本は合冊本で全十一冊である。最終の十一冊は「智慧の庫附録合本全」とあり、附録を合冊したものである。

合本十号の巻末は百号の附録で、前書に次のように記されている。「……幣庫ハ明治十年二月に始て開扉まして毎月一度の發兌積りて今明治十七年十一月に至り百号を出しますが是ハ之看客様の愛顧に……」とあり、今後も続くような表現になっているが、百号で終わったようである。

本書の第一号掲載記事の目次を紹介しよう。

。鉄器に水を入れて鑄の出む法。鮮魚を貯ふ法。髪刷を濯ふ法。牛乳を貯ふ法。硝子に孔を穿す法。水を純粹にする法。紙の火に燃ぬ法。鉛筆にて書きたる墨の落ぬ法。麦稗製の帽子を清潔にする法。紙の油污をぬく法。水の善悪を見分る法。象牙に銀鍍する法。陶器を清潔にする法

これまでの出版物と比べると奇をてらうような事項やオカルト的・神秘的・超自然的―記述は無く、その内容は極めて今日的であり強いていうなら、諸事手引書・マニュアル本の元祖というべきものであろう。

このような出版物は次から次へと出版され、現在ではスマホで簡単に検

索できるグノシーなどが出版物に取って代わろうとしている。

こうした出版物は確かに生活に便利な情報をもたらしてくれるが、当然膨大な情報を暗記できるわけではない。しかし読んだことにより分かった気分、理解したように思うことができるのである。勿論幾つかは覚えていて、何かの時にその情報を話し優越感に浸ることができるわけである。

おわりに

近代に至り情報の閉塞状態から解放された日本人は否応なく西洋文明の中に投げ込まれた。文章の書き方、書状・手紙の書き方、西洋の数字、加減乗除計算の方法、定時法、太陽暦採用、正月行事・年中行事の太陽暦化等々枚挙にいとまない。

西洋文明は優れたものという国民の意識は政府の方針に抵抗することなく従った。上流階級の中にはキリスト教信者になるものもいたが、その教えを理解し入信したのも多数いただろうが、入信することはエリート意識にも繋がったように思える。

こうした状況の中である程度の地位にあるものの中には西洋の知識を得たいということ、様々な啓蒙書を熟読或は拾い読みで何となく分かったような気分になれた。本稿で特に取り上げた西洋文明の啓蒙書は物理や化学等に関するもので、多くの日本人が初めて接する分野である。

何となく知りたい、他者より知りたいという一方、これら啓蒙書が契機となつて学問の道に進み研究者になつたものも多々いたであろう。

西洋文明の流入に晒された日本であるが、明治中期に入ると政府は日本が欧米諸国と同等になつた独立国という意識を国民に抱かせ、天皇に至つては欧米諸国より優れ尊い存在、即ち天皇の神格化を進めたのである。その上日本のあるべき姿は天皇を頂点に戴く国家であるとしこれを國體とした。国民の次に進む方向を国家が作り上げたのであり、これにより文明開化の時代は終焉を告げたのである。

知りたいという欲求、他者よりも知りたいという欲求により蓄積されてきた知の質にはかなりの格差はあるもの、蓄積された「知」がダイナミッ

クに活用されることはあまり無かつたようである。政府・世間は物識り或は博覧強記であることは優秀とみなし、入学試験も暗記力が試される傾向にあった。尤もこれは江戸時代以来のことであり、現在でも博覧強記は頭が良いとみなされる。

しかし蓄積があつたからこそ西洋或は欧米から怒涛のごとく流入する有形無形のもの驚くべきエネルギーによって咀嚼し日本化していくことができたのである。そのエネルギーは江戸時代或はそれ以前から培われたものである。島国日本は海外からもたらされたものを改良に改良を重ねて新たなものを作り上げた。その頂点が「和時計」である。今後そのエネルギーは衰えることはない。日本化したものをより発展させ、日本ならではの「モノ」を作り出し世界の人々の隙間に入り込んでいくだろう。

知りたいという欲求、他者よりも知りたいという欲求は洋の東西を問わないかもしれないが、日本人には特にその欲求が頭脳にインプットされてしまつていくようだ。こうした知の蓄積が今後日本を動かしていくのだろう。そして今後も欧米コンプレックスから解放されることはなく、流入する多様なものをいち早く取り入れたことを誇り、新しいもの次世代に続くものを生み出していくだろう。

本稿は日本という国の姿の一端を明らかにするための試みとして執筆したものである。

(やまもと みつまさ 交通史学会元会長)